

遐想と山水—東晋期を中心に—

斎藤希史

晋宋期における山水描写の展開を考える上で、先行する招隠詩や遊仙詩の意義についてはかねてより指摘されてきた。山中にわけいって別世界を知覚し、それを表現しようとする点において、たしかに山水詩に先行する系譜を見ることができる。郭璞「遊仙詩」において古くから指摘されているように、これを「遠遊」の系譜に置くこともできよう。一方、蘭亭詩など東晋期においてさかんに作られた上巳詩において、俗外の空間を背景にした繊細な自然描写がまま見られることは興味深く、例えば庾闡の上巳詩の「自然への構え」が彼の「遊仙詩」と同様であることもすでに指摘されている（佐竹保子「庾闡の文学とその遊仙詩」1987）。

「上巳詩」においては、天を仰いで視線を放つ遠望と地の万物に目を凝らす微視とがしばしば定型的な描写として現れ、また、そのように複数の視野を操作することから天地万物に対する何らかの想念を導き出すこともまた詩の定型の一つとなっていた。帰隠をうたう賦が「浴沂」の故事を用いて、万物が生まれる春を脱俗の契機とし、心を世から解き放つ場としてきたことが、その背景にはあるが、見ることと想うことの結びつき（あるいは交錯）は、やはり東晋期以降に顕著であるように思われる。

そしてそうした交錯は、同時期の支遁らの詠懐詩にも看取され、遊仙や上巳や詠懐などといった当座の主題や用を超えたところで、詩という表現の一つの基底となりつつあった。山水詩は、その基底の上に、もしくはその基底を示すものとして成立したと言える。見ることと想うことについては、伝統的な「登高」における表現が先行するが、予定された感慨のために遠くを見ることと、見ることそのものによって想念を生もうとすることは異なり、その相違もまた、山水詩—新たな表現の基底—の生成と関わりがある。本発表においては、こうした視点から、東晋詩の特質について、それぞれの表現に即しつつ、考えたい。